

## 戦闘報告未記載事項

夜空に閃光が灯った。照明弾のように。隠れている瓦礫一面が明と暗の二階調でくつきりと照らし出される。その眩さが静寂を際立たせる。思わず体を硬くした彼は、肩越しに振り返った。

すぐ後ろに控えている父親ほどの年齢の召集兵がゆっくりと首を横に振る。視線が上を向いてからぐるりと回り、指先が複雑に動く。

慌てるな、とその動きが伝えてくる。その背後にいる突撃兵は天を仰ぐようにしてのけぞって、どうやら眠っているようだった。

もう一発、少し離れた空に明かりが灯る。影が長く伸びて、さらにその向こうに続く隊員達の姿を複雑な陰影の中に隠していた。

向き直った時に状況は一変していた。既に影が支配し始めている中に動き回るものがあつた。

片手をあげて背後の兵達に合図を送りながら軽機関銃の安全ラッチを指ではじいて外す。視界を横切る動きは光が消え去って行くのとは逆に音がはつきりと聞こえるようになってきていた。

前方から聞こえる瓦礫の破碎音に被さるように背後から呪術兵が唱える結界呪文がその大きさを増してくる。

彼はこの待ち伏せ期間中たとえ声には出さずとも幾度も様々な呪文を唱えていたに違いない。その声が今でははつきりと聞こえる。高く低く、その声音が力強い。

瓦礫をかき分ける音はそれ以上近寄ることもなく、闇はまた静寂に戻っていく。幸い単独行動のツアグの眷属だったようだ。銃の安全ラッチを戻して闇に目をこらす。まだまだ魔界軍本体は地上から戻ってこない。この魔界境界層では時間も意味を持たないだけに緊張は通常兵とは比べものにならない。

この這行性暗黒神については報告の必要もないと、今一度瓦礫に体を預けて考える。そしてあの照明弾様の光の正体は何なのか帰ったら召集兵に聞いてみようと思うのだった。